2025年6月29日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

平和な人として

［フィリピの信徒への手紙4章4～14節］

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。さて、あなたがたがわたしへの心遣いを、ついにまた表してくれたことを、わたしは主において非常に喜びました。今までは思いはあっても、それを表す機会がなかったのでしょう。物欲しさにこう言っているのではありません。わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。それにしても、あなたがたは、よくわたしと苦しみを共にしてくれました。

　主にあって、飾らないお証しを皆で聞き、また、素朴な気持ちをもってご一緒に讃美する交わりがここに生まれていることは、本当に嬉しいことだなあと思います。これは、Sさんにも感謝ですけれども、私たちがここで感じることは、この交わりの真ん中に神様がおられる、ということだと思います。Sさんが神様を賛美しないではいられない心に導かれたということ、それは私たち一人ひとりのことでもあると思います。今“ここ”に一緒に導かれていること自体、振り返ってみればこれは神様からの大きな奇跡だとも言えるように思うのです。

　パウロの「フィリピの信徒への手紙」。これは、彼の遺言のような手紙だということを先週もお話ししました。彼はどこかで自分の「死」というものも見つめつつ書いている手紙のように思うのです。3章にはこんな言葉もありました。「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」（フィリピ3：20-31）。―わたしたちの本国は「天」にあるのだ、と言い切っています。この「天」から、ここに、私たちの所に「光」が差しているのです。教会の屋根を突き抜けて、ここは、たとえどんなに暗く思えることがあっても、天からの光が射す舞台です

　先ほどお読みした4：4以下も同じです。―「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。」―「喜びなさい」と二度繰り返しています。命令形であることが、いいなぁ、と思います。「喜べ！」 ある意味、自分の心に抗っているのです。とても今、自然には喜べる環境ではないかもしれない。それでも「喜びなさい！」。ただ「喜びなさい」じゃありません。「主において」喜びなさいと。主イエス様がいて下さるのだから、ということですね。そして喜びは「広い心（＝寛容な心、優しい心）」も創り出し、それが周りにも伝染していく。それには根拠があるとパウロは言っているのですね。「主はすぐ近くにおられます」と。「近い」。これは必ずしも物理的なことではないでしょうね。以前の訳では「主は近い」という訳でした。時の近さでもあるのです。主が再び来られて、救いを完全に成し遂げ、この世界の悪や不条理が清算される時がやって来るのだ、その希望があるのだから、「重ねて言います。喜びなさい」と命じて語っているのです。パウロ自身も、厳しい環境に身を置きながらも、今の自分に言い聞かせながら語っていると思います。

　そしてパウロは、信仰生活の秘訣を語ります。特に、「祈る」ということが出来るという恵み。6～7節。「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」 この手紙の中でも、特に愛されている言葉だと思います。

そしてこれはもともとイエス様が私たちに教えて下さったことです。「明日のことを思い煩うな。明日は明日自身が思い煩うであろう」（マタイ6:34 口語）。私たち、キリスト者になって最高に良かった！と思うことの一つは、「委ねる」ことができるようになったということではないでしょうか？これは素朴なことですが、小さなことではないと思います。自分ではどうしようもないことは沢山ありますね。いえ、そんなことばっかりの私たちの毎日です。でも、私たちの「明日」を引き受けて下さる方があるのだから、「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」

　「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ」。それこそ‟数えてみよ、主の恵み”です。感謝出来ることがたくさんある筈。生かされていること、赦されていること、また、誰かの助け。今ここにこうしていること。また幸せな思い出。それらは、皆、私たちの中に射す「光」です。この「光」によって、「あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守る」とありように、神様からの平和（平安）が心を支配するようになると言うのですね。大切なのは、これがわたしの中からではなく、「神からの」平和だということです。

　先週放送のNHKの朝ドラの『あんぱん』の中で、とても印象的なシーンがありました。「アンパンマン」の作者やなせたかしが、戦争から生きて戻ってきて、荒野原で、やがて奥さんになるのぶさんに会う場面です。のぶはもともととても前向きな人なのですけれども、この時のぶはとても絶望しているのです。学校の教師として「愛国の鑑」と呼ばれることを喜んでいた自分だったけれども、自分は何と間違っていたことか、多くの子供たちにお国のために立派な兵隊になりなさいと言ったり、女の子には、お兄さんが戦地に行くことを笑顔で励まして送り出しなさいと言ってしまった。私は生きていていいのだろうか、生きる資格があるのだろうか、と。それを聞いたたかしは言うのです。「死んでいい命なんて一つもない。殺されていい命なんてない。「正義」なんていうものはひっくり返ることがあるんだ。何が本当の正義なのか自分も分からない。でも、僕はみんなが喜べる、笑顔になれることのために生きて行きたい。のぶちゃんも絶望せずにその命を生きて欲しい」。

　これは、私たちへの神様からのメッセージにも重なると思いました。私たちは弱いです。時代に翻弄される、長い物に巻かれ、いつしか誰かを叩いたり、傷つける側に立ってしまうことがある。自己保身がそこにあります。色んな言い訳もできるかもしれない。でもそうじゃない。そうじゃない！神様の光に照らされて生きるということが私たちには求められていると思います。パウロは、イエス様に捕えられて、自分の立ち位置というものへのこだわりが消えて行った人です。それこそ‟委ねて生きる人生”を知りました。11節以下。「わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」

　それまでの彼は、キリスト教会の迫害者ですよ。自分ファーストです。私たちも結局自分が可愛いということはないか…。けれどもパウロは、今はそのキリストの福音のために捕えられていつ死ぬともわからぬ状況下にいて、そして、教会の皆を励ましているのです。最早たかぶる人ではなく、本当に神様の平和を頂いた‟平和の人”として生き、語っていると思います。私たちも、そのように今導かれていることを信じて生きたいと思います。この13節の言葉が良いですね！―「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」。　お祈り致します。

主なる神様、感謝致します！あなたは、私たちがどのような中にあっても、絶望しないで生きて行く力与えて下さいました。十字架の上で、わが罪は死んでしまったということを深く信じさせて下さい。そして、どうぞ私たちを、あなたの光の中に導き、「平和の人」として捕らえ、遣わして下さい。この教会の交わりも、ますますあなたの恵みの中で喜びに満ちたものとなり、導いて下さいますように。もうすぐ7月を迎えます。どうぞ、私たちも霊肉共にお守り下さいますように。これから行われるお昼の交わりも祝福して下さい。主イエス・キリストのお名前によってお祈り致します。アーメン。